

原 著

大学英語授業における読解能力向上に関する一考察

—多読・精読の有効性と課題点をめぐって—

荻野 勝^{*1}

要旨：近年まで大学の教養英語の読解の授業は、精読中心に行われてきた。しかし最近、主に日本人以外の英語教員によって多読の授業が展開されてきている。それは、Graded Readers等の平易な英語で書き直された本を、学生が自分の英語能力のレベルに応じて自由に選択して読むという授業形態だが、学生にもおおむね好評のようである。しかし、英文を正確に読むという点では、精読も欠かせない。多読と精読の議論は以前から行われているが、本論ではもう一度、多読と精読の有効性と課題について整理し、1) 英語嫌いに悩む学生、2) 英語嫌いではないが英語を苦手とする学生、3) 英語にある程度の自信を持つ学生に効果的な授業および学習方法を考察する。

キーワード：英語教育、読解、多読、精読、コミュニケーション

※1 荻野勝（岡山大学言語教育センター英語系）

はじめに

大学の授業における「読解」の授業は、常に議論の対象となっている。昔ながらの「精読」を中心とした授業を行っている教員もいれば、最近では日本人以外の教員を中心に「多読」の授業が広まってきている。本論では、「多読」・「精読」それぞれの有効性と課題点を整理して、その上でどのような学習方法を学生に提案したらよいかについて考察する。

大学の「読解」あるいは「講読」の授業の役割とは何であろうか。それは、かつては、第1に「正しく英文を読むことを練習すること」であり、第2に「より速くより多く英文を読んでいくこと」であった。しかし、近年の授業は、正確に英文を読むことより、「より速くより多く」が強調されてきている。

確かに現代社会において「より速くより多く」英文を読むことが求められていることが多い傾向にあるが、英文を正確にとらえることも忘れてはならない。本論では、多読と精読を相反するものとして扱うのではなく、互いに補完しながら学習者の英語力向上を助けるものという視点で考察していく。

読解の授業における多読・精読の有効性と課題点

1. 多読について

多読の有効性

多読の授業の有効性としてあげられるまず第1の点は、学生が授業に対して、より「楽しい」という感覚を持って臨めることである。多読の授業方法は様々であり、例えば、授業外で本を読み授業中は読んだ本について発表するという形式もあれば、授業内で多読を実践するという形式もあろう。また、学生が毎週読んだ本に関して記録を残して、定期的に記録用紙を教員に提出するという授業もある。これらのいずれの形式であっても、毎回の授業で1冊の本を読み終えるという達成感を味わえる点が、学生が多読の授業に対して「楽しい」という感覚を持つ要素かもしれない。

次に第2の点は、学生が自分で選んだ英語のテキストを自分のペースで読むことにより、英語により親しみを持つようになり、それが英語への興味につながるということである。英語学習において学生の主体性を強調することで、学生の英語への興味がより喚起されるのである。

多読の有効性の第3の点は、日本語を介さずに英文を読んでいくということである。精読の課題点として後に述べるが、精読では英文を日本語に直しながら読み進めるため、時に振り返り読みをするなどして読解速度が遅くなり、読み方もぎこちない。多読で前から読み下していくと、読解速度も読解量も増大し、これが自信につながるのである。

第4の点は、比較的平易な英語に触れることにより、英語に慣れることができる、ということである。難しい英文を精読する場合は、心の準備をしてから読解に取り組むことになるが、多読の場合は英文が比較的平易なので、英文を読む前に気構える必要もない。気構える必要がないことにより、学生は気軽に多くの英文に触れ、その結果英文に慣れることができるのである。

第5の点は、上であげた4点全てと結びついているのだが、学生の英語嫌いが改善されるということである。多読の体験を楽しいと感じ、学生が主体的に自分の読む英語を自分で選び、英文を英文として読み下し、その結果英語に慣れた学生は、英語嫌いが解消するのは当然のことであろう。

・多読の課題点

多読の授業の課題点としてあげられる第1の点は、誤読¹をしてしまうということである。細かいことに注意をはらうよりも大まかなストーリーの展開に注意をはらう多読では、これはやむを得ないことである。しかし、誤読が重なってストーリー全体を取り違えてしまう、英語の微妙なニュアンスが理解できない、という問題も存在する。

第2の点は、学生が自分の誤読に気がつかないことである。学生は誤読をしているにもかかわらず、自分が正確に読んだと勘違いしてしまう可能性も否めない。また、学生が英文を読み始めてある程度の時間が経過すると、内容が全く分からなくなってしまうことも生じるため、この状況では自分がどこでどのような誤読したのか確認できないであろう。

第3の点は、教員の側も学生の誤読を確認できないことである。テキストによってはtrue or falseやcomprehension checkなどによって内容確認ができる場合もあるが、細かいところまではチェックできず、学生の誤読をそのままにしておく場合も少なくないことが想定できる。多読の授業中に、誤読がないように、学生一人一人の読解を個別に指導することは、時間的・人数的などの要因で困難と思われる。

多読の第4の課題点として、上の3点とも関係するが、学生が英文の誤読を続けていくと、ストーリーの展開が分からなくなり、そのまま英語学習から遠ざかり、それが学生を英語嫌いにしてしまうという可能性もあることである。英語嫌いになって一度学習を止めてしまうと、それを再開するには大きなエネルギーを必要とするのである。前項において、多読の有効性として英語嫌いの解消をあげたが、指導

法を誤るとかえって学生の英語嫌いを助長する可能性もある。

第5の点として、多読では、相当量の英文を読まない限り、英文法や語彙が定着しないということがあげられる。大学では、学生が中学校や高等学校で学んだ英語を前提にして授業を行うが、様々な入試形態で入学してくる学生の様態として、文法や語彙のおぼつかない者もいることもまた、現実としてある。そのような学生が自分の言いたいことを英語で表現できるようになるには、多読だけでは文法や語彙が十分に備わらないと考えられる。

最後に、学生に任意で教材を選択させると、学生がいつも平易な教材を選んでしまうということもある。学生の人数の多少にかかわらず、全てを学生の判断に任せると、安易な方向に流れてしまうという可能性もあるのである。

2. 精読について

・精読の有効性

次に精読の有効性について考えてみよう。精読の有効性としてまず第1にあげられるのは、英文の構造を正確に理解できるということである。多読では何となく分かっているにもかかわらず正確に分かったかどうか確認できないところを、精読では正確に確認できる。

第2にあげられるのが、英語の微妙な言い回しを理解できるということである。助動詞や前置詞などの微妙な意味の違いは、教員の適切な指導や辞書を活用することで可能となる。例えば、*The thief pressed his ear to the door and listened for any sound inside the room.* という文章では、どうして *listened* の後が *to* ではなく *for* であるのか。これは、前置詞の *to* と *for* の意味の違いによるもので、*listen to* は、ある対象に「対して」耳を傾けるという意味であるが、*listen for* は、何かを「求めて」聞き耳を立てるという意味である。このように前置詞が変わっただけで意味が変わってしまう文を理解することは、学生による多読だけでは困難であり、教員による適切な説明が必要であると考えられる。教員による説明がないと、学生は意味の微妙なニュアンスをとらえられないまま、読み進めていってしまう可能性が高いのである。

第3にあげられるのが、精読をすると、扱った英文を英作文に応用することが容易になるということである。精読の授業では英文構造や文章展開の型²を中心に扱って英文を読み進めるので、学習者は実際に読んだ英文構造や文章展開の方法を意識するように

なり、自分で英文を作成するときにそれを活用しやすいのである。もちろん多読で接した英文を英作文に活用することも可能であるが、高瀬が述べるように、それを応用して「アウトプットに結び付け、ライティング力を向上させるにはインプットされたものを定着させるプラスアルファの作業を加える」という作業が大切となる。つまりここでの「プラスアルファの作業」とは、学生が英文構造や文章展開の型を意識しながら英文を読んでいくということであり、英文構造や文章展開の型をとらえるには、多読という作業のみを行うより、精読を取り入れた方がより効果的であると考えられるのである。

第4にあげられるのが、精読した文章を反復して読むことにより、学習者の英語力は向上し、英語学習に対する興味も増大するということである。精読した文章を読み返すことは、英文構造や語彙を自然に覚えらるることの他に、英語のリズムに慣れるという効果がある。最初は格闘しながら英文の意味を解釈していたのが、次第に一目見れば英文の意味がそのまま理解できるようになる。一度精読した英文を何度も反復して読んでいるうちに、無意識に意味の切れ目、即ちチャンクごとに英文を読み下し、精読の悪い習慣といわれる「返り読み」をしなくなる。気がつくと、学生は英語を英語のまま理解しているのである。

このレベルまで達すると、学習者はある意味で独り立ちできる。多読をするように言われなくても、自分から英語の本を探してきて自分で読み始める。もちろん難解なところは精読式に構文に注意して読むが、それ以外の所は英文を日本語に直すことなく読むようになるであろう。この時点で、学習者は精読と多読とを上手に使い分けることができるようになるのである。

・精読の課題点

精読の課題点としてまず第1にあげられるのは、これはよく言われていることであるが、英文和訳の授業になってしまうということである。学生は、英文を理解しようという気持ちよりも、とりあえず教師の言う模範訳を書き取ろうという気持ちが強くなり、英語の授業ではなく、日本語の聞き取りの授業のようになってしまうことも多い。学生は、教師の言う和訳を書き取ることによって英語を勉強した気持ちになってしまうのである。

第2に、精読の授業は退屈になってしまう可能性が高いということがあげられる。学生に和訳を発表

させて、間違いを指摘し、模範訳を示し、文法上の細かい点を説明していると、膨大な時間を数少ない英文の解説に費やすことになる。そして概してこの種の授業は学生にとって退屈なものである。

第3に、精読の授業では、学生が受け身の態度になってしまうという傾向も否めない。この種の授業は、学生側の予習復習がしっかりできている場合は非常に有効であるが、ややもすると学生は、授業中ただ座って教師の言う訳を写していればよいと考えるようになる。そうなると精読の授業は学生の英語力向上に効果の薄いものになってしまうであろう。

第4に、精読のみを行っている、学生の中には「難しい英文を精読すること＝英語学習」のようにとらえてしまう者が出る可能性があることである。英文を読むことは、作者が伝えようとする内容を理解することであり、この点では英文を読むことも日本語を読むことも本質的には変わらない。しかし、精読のみを行っている、英文読解を、ただ単にパズルを解く行為のようにしか考えなくなる者も出てくるであろう。そのような傾向にある学生は、難解な英文読解に対しては得意とするが、本全体、章全体の要旨をとらえながら英文を読み進めていくということが困難な可能性が高い。

第5の点は、第1の点と関係しているが、授業で精読を行っている、和訳はできるのだが、内容理解ができていない学生がいるということである。学生は、英語を日本語に置き換えることだけに集中し、英文の内容をとらえようとしないのである。定期試験は、英文の和訳を暗記して切り抜けようとする。これでは授業で英文読解を学ぶ意味が薄れてしまう。

・効果的な授業形態および学習方法の考察

前章では、多読・精読それぞれの有効性と課題点について述べた。これらを踏まえ、ここでは大学においてどのような授業形態や学習法が効果的であるか考察したい。考察するにあたって、本論では学生を、1) 英語嫌いの学生、2) 英語嫌いではないが英語を苦手とする学生、3) 英語にはある程度自信がある学生、の3つのグループに分けて考えたい。もちろん1クラスのうちにこれら3つのグループの学生が混在する場合もあるであろうが、担当教員が自分のクラスはどのグループの学生が多いかを把握することで授業形態を工夫できるであろう。

1. 英語嫌いの学生の読解について

英語嫌いの学生に対しては、多読を導入すること

が効果的である。もともとこのタイプの学生は中学校・高等学校時代の文法の授業や、文法を活用した訳読の授業で英語を嫌いになってしまったと思われる。彼らは「英語が嫌いになる→英語に触れる回数が減少する→英語に自信がなくなる→ますます英語嫌いになる」という悪循環の中にあり、英語に対する意識を変革する必要がある。そしてその意識変革のきっかけとなるのが多読なのでないかと思われる。

この場合の多読の教材は、学生が親しみを感じられたり、興味を持ったりすることができるようなものを、教師が用意しておくことが必要であろう。高瀬の言うように、絵本をたくさん読むのも良いだろう。また実際に岡山大学で取り組んでいるように、Penguin Graded Readers や Oxford Graded Readers 等の教材を、図書室にそろえておくこともよいであろう。一番大切なことは、学生が英語に触れることである。英語で読んで内容が何となくでも「分かった」という達成感や喜びを得ることである。学生は内容が分かってくればもっと他の本を読みたいと思ひ、次第にもっと難しい語彙を含んだ本を、もっと語数の多い本を読みたいと思うようになるであろう。

簡単な英語なら読める、理解できると思ひ始めた学生は、次第にもっと内容の難しいものに挑戦するようになるかもしれない。このときに学生は課題に直面し、それらは2種類あると考えられる。そのひとつは学生の語彙力不足であり、もうひとつは文法力不足である。これらの課題を克服するための方法は、次の2種類ではないかと思われる。1) 今まで通りの比較的平易な英文に戻る方法、2) これまでより難度の高い英文に取り組むべく語彙・文法の学習を開始する方法、である。

このうち、2) については次のような注意が必要である。なぜならば、英語アレルギーをなくすべく文法中心の学習から離れて多読を開始したにもかかわらず、再び文法や単語を覚える学習に戻ってしまう可能性があるからである。つまり、文法はあくまでも読解を助けるための手段であり、文法のための文法の学習を行わないことが肝要である。また、語彙は単語帳をめくるように機械的・盲目的に覚えようとするのではなく、同じ語彙に何回も遭遇しながら自然に身につくようにする、ということも肝要である。

また1) を選択した場合も、いずれは2) の作業が必要となってくる。簡単な英語から再びレベルを上げていくと、次第に意味の確認が必要な事柄が出てくるからである。例えば、An earthquake can happen.

という文における can は、「…できる」という「可能」を表しているのではなく、「…することもありうる」という「可能性」を表している。このような微妙な意味の違いに、多読をしている場合にも次第に注意がはられるようになる。学生は can の意味は「…できる」のはずだが、当該の文では「…できる」という意味は当てはまらないと気づくであろう。

この場合、文法書や辞書で can について調べることが、やはり必要である。しかし、上でも述べたが、文法は英文を理解するためのものであり、文法を文法として覚えるためのものではない、ということを経験者はいつも肝に銘じておかなければならない。

以上のように、英語嫌いの学生に対する多読中心の英語学習の要点は以下の2点である。1) 語彙は無理して覚えようとするのではなく、何度も遭遇する語彙を自然に覚える。2) 理解する上で困難なところは抽出し、必要に応じて文法に照らして理解するという精読を取り入れる。これらの方法を行うことにより、英語嫌いの学生の読解力向上に、多読と精読が関連しながら有効に働いていくと考えられるのである。

2. 英語嫌いではないが、英語を苦手とする学生の読解について

このタイプの学生には、比較的平易な英文を精読することによって英文法や語彙の復習や定着を図る方法が効果的である。これは、中学校・高等学校で学生がつまづいた文法を使って細部まで説明しながら、英文を訳読していく方法である。

この方法は「1. 英語嫌いの学生の読解について」で述べた事項と、一見正反対の方法と考えられ、また、従来の訳読の授業と同じだと考えられがちであるが、少し異なる。Ⅱ章2節①項「精読の有効性」の第4点で述べたが、学生に英文テキストを反復して読むことを課題とする方法である。例えば、今週1課を読み終えたら、来週2課を読む際には1課を必ず読み終えてから2課を読むようにする。再来週3課を読む際には1課と2課を読み終えてから3課に取り組むようにする。以後4課、5課と同様に行うのである。

課が進むにしたがって読み返す量は増えるが、その分だけ英語を読む力はついていくため各課を読み終える時間は短くなり、慣れてくるとそれほどの負担には感じない。また既習の課を反復して読むことは、新しい課のウォーミングアップとなるため、新しい課の読解がより易しく感じられてくるようになる。

この学習方法の第1の利点は英語の構文が自然に

身になってしまうことである。例えば、not onlyがあれば、次のどこかでbut (also) が来るはずだとか、soの後に形容詞が来れば後ろにはthat節が来る可能性があるとか、the important thing isとあれば、その後ろにはthat節がきて作者の主張したいポイントがまとめられているということが、「無意識に」分かるのである。

また、第2の効果として、書き言葉の英語のリズムに敏感になる、ということがある。英語の話し言葉では、冠詞や前置詞などは弱く、そして動詞や名詞などは強く発音され、文全体として「弱強」あるいは「強弱」のリズムがある。同じテキストを何度も反復して読んでいるうちに、学生は書き言葉にも同じようなリズムがあることに気づくであろう。すると、黙読していても頭の中で音読しているように、強弱をつけて、意味の切れ目に注意しながら英文を読む習慣が身につくのである。

ある程度の英文、例えば200 wordsの英文を50位、毎週反復して読むことができるようになると、学生の学習意欲が向上するであろう。学生から進んで他の英文を読むようになる。そのときに「1. 英語嫌いの学生の読解について」で述べたGraded Readers等の英語を学生に紹介すると効果が大きいと考えられる。それまでに習得した文法や語彙で、学生は多読を楽しむことができるであろう。

前節で述べた「英語嫌いの学生に対する多読の導入」とこの節で述べている「英語嫌いではないが英語を苦手とする学生に対する精読の導入」は、一見相反するように思われるが、アプローチは異なっても、最終的には多読と精読が補完し合いながら学習者の英語力や英語学習意欲を高めるのに役立つものである。前者は多読から、後者は精読から始まる学習であるが、前節の末尾で述べたように、最終的には両者が関連しながら有効に働いていくと考えられるのである。

3. 英語にある程度の自信を持つ学生の読解について

英語学習に興味を持ち、ある程度英語に自信を持つ学生は、多読を中心に言いながら、精読を時折行うと良いと思われる。このタイプの学生は、すでにある程度の英語力があり、英文構造や文章展開の型をすでに習得している。英文を誤読した場合も、自分でそれに気づくことができる。また、英文が理解できずに教員に質問する場合も、どの部分が理解できないかを自分で判断できる。それ故、このタイプ

の学生は自分で英文を選択して自由に挑戦するとよいと考える。

この学習方法は、「1. 英語嫌いの学生の読解について」で述べた学習方法と一見同じように思える。しかし、両者は異なるものである。「1. 英語嫌いの学生の読解について」で述べた学習方法は、学生が英語に親近感を持つために、絵本などの平易な英語に数多く触れることを提案した。それに対し、この節で提案している学習方法は、英語を通して学生が自分の視野を広げることに主眼が置かれているのである。英語嫌いの学生は、まず英語に対する肯定的な感情を持つことが重要であった。一方、英語にある程度の自信を持った学生は、さらに英語力を伸ばしながら、英語を通して知識を増やしたり、教養を深めたりすることができるようになることを目指しているのである。

このタイプの学生の英文の読み方を見てみよう。彼らは多読をしながらも、無意識に文構造の細かいところにまで注意を払って読解するという、ある意味で高いレベルの多読/精読ができていたのである。彼らは、多少高度な英文であっても、それ程速度を落とすことなく読み進めることができ、また英文の構造や英語表現のニュアンスもある程度理解可能なのである。

それでは、このタイプの学生に対する教員の役割は何であろうか。それは、質問等に答えることにより、学生の英文読解を助けることはもちろんであるが、学生が新しい未知の分野へと向かう橋渡しをすることである。英文読解を教えるだけでなく、英語を通して物事をさらに深く広く知ろうという気持ちを、学生に持たせることである。多読の授業にせよ精読の授業にせよ、教員は授業で扱った内容をさらに押し広げ、その内容に関して学生にインターネットや書籍を通してさらに調べさせるということも重要である。その意味では、教員自身の教養の深さ広さも重要性を帯びてくる。

さて、英語に自信を持つ学生に関して、ひとつ注意すべき点がある。Ⅱ章2節②項「精読の課題点」の第4点として述べたが、英語に自信を持つ学生の中には「難しい英文を精読すること＝英語学習」のようにとらえる者がいる。このような学生は、英文読解をパズルを解くのと同様に考える。「こんなに長く複雑な英文を解読できたぞ！」という気持ちになり、ただ「解読できた」という点にのみ、満足を見出ししてしまうという危険性をはらんでいる。

このような学習方法を否定するものではない。し

かし、英文を読むということは、読者が作者の主張を理解すべく読むことであり、その意味で英語は作者の主張を読者が理解するための媒体だと考えると、もっと広い視野で英文読解を考えた方が有効であろう。

また、学生が将来英語を活かした職業に就く場合、まさに英語はコミュニケーションの働きを持つ。このような観点からも、英語に自信を持つ学生には、たくさん英語に接しながら自身の見聞や視野を広げていってもらいたいものである。

・ 結語

以上、多読・精読それぞれの有効性と課題点を詳しく検証し、その上で、1) 英語嫌いの学生、2) 英語嫌いではないが英語を苦手とする学生、3) 英語にある程度の自信を持つ学生、に対する授業形態や学生の学習方法を考案した。

多読・精読の有効性と課題点、3種類の学生グループに対応した授業形態や学習方法をここにまとめる。

多読の有効性

- 1) 学生が英語に対して「楽しい」という感覚を持てる
- 2) 学生の英語への興味が喚起される
- 3) 日本語を介さずに英文を読む
- 4) 英語に慣れることができる
- 5) 学生の英語嫌いが解消される

多読の課題点

- 1) 学生が誤読をしてしまう
- 2) 学生が自分の誤読に気がつかない
- 3) 教員も学生の誤読を確認できない
- 4) 誤読が原因で、学生が英語嫌いになる可能性がある
- 5) 英文法や語彙が十分に定着しない
- 6) 授業で、学生が常に平易な教材を選ぶ可能性がある

精読の有効性

- 1) 英文の構造を正確に理解できる
- 2) 英語の微妙な言い回しを理解できる
- 3) 読んだ英文を英作文に応用できる
- 4) 英文を反復して読むことにより、英文を英文のまま理解できるようになる
- 5) ある程度英語力がつくと、自分から多読を始める

精読の問題点

- 1) 英文和訳の授業となる
- 2) 学生にとって退屈な授業となる場合がある

- 3) 学生が受け身になってしまう可能性がある
- 4) 学生が「英語学習＝難解な英文読解」と思ってしまう
- 5) 和訳をしても、学生の内容理解ができていない場合がある

英語嫌いの学生に対応した授業形態や学生の学習方法

絵本などの多読を中心に学習を行いながら、理解することが困難なところは、必要に応じて文法に照らして理解する。

英語嫌いではないが英語を苦手とする学生に対応した授業形態と学生の学習方法

比較的平易な英文を精読する。精読した文章を何度も反復して読むことにより英文に慣れる。

英語にある程度の自信を持つ学生に対応した授業形態と学生の学習方法

多読を中心に学習を行うが、ここで言う多読は英語を通して学生が自分の視野を広めるための多読である。

上の考察の結果、多読と精読は、一見相反する読解方法のアプローチであるように思われるが、最終的には両者が補完し合うような授業形態・学習方法が望ましいのではないかと考える。特に、一度精読した英文を何度も反復して読むことは、多くの英文に触れることになり、英文のリズムに慣れ、効果的な学習方法であることに触れた。この学習方法は、多くの英語に触れるという意味で、多読と同じ様な効果を持つと考えられる。

また英語の文章について、学習すべき外国語として見るのではないという意識をも育成していかなくてはならない。英文に、作者が読者に何かを伝えようとするコミュニケーションの働きがあるとみなすと、学生自らが、自分が学習している教材に対して、作者が読者に何かを伝えようとしていると認識し、それを理解しようとしたとき、学習者の真の意味の英文読解力の向上、英語を学ぶ目的意識の変化、世界を見る視野の拡大等を助長していくことができると考えている。

注

1. 本論での「誤読」とは、英文を構文的にとらえることができていないこと、熟語の表現が理解できていないこと、という意味である。
2. 本論での「文章展開の型」とは、例えば“*It is true*

…, but…”のような、筆者が文章や論旨を展開する上で使用する表現の型である。

【参考・引用文献】

高瀬敦子 (2010).『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館書店. pp.3-58.

長崎玄弥 (1975).『奇跡の英熟語』詳伝社. p.13.

本論は、平成 22 年 10 月 2 日に岡山大学にて開催された第 33 回岡山英文学会にて行われたシンポジウム「岡大用英文テキストの作成と英文読解をめぐって」において行われた発表「多読と精読：読解の授業におけるその長所短所の再検討」の原稿を大幅に加筆修正したものである。

Title: Extensive Reading and Intensive Reading: Their Merits and Demerits Reconsidered

Name: Masaru Ogino (Language Education Center, Okayama University)

Keywords: English education, reading English, extensive reading, intensive reading, communication

Abstract:

In the area of teaching how to read English at Japanese universities, intensive reading has been emphasized. But recently, extensive reading seems to have started to attract more attention especially among non-Japanese English teachers.

In this essay, the merits and demerits of both extensive and intensive readings will be discussed. And an ideal reading practice will be proposed for each of the following three groups of English-learning students: the students who are allergic to English, those who are not allergic to English, but who are not very good at English, and those who are confident of their English ability.

In the final analysis, we come to the conclusion that although extensive reading and intensive reading are thought to be opposed to each other, they can actually be useful in improving learners' reading skill in English, complementing and reinforcing each other.
